

滝之脇遺跡

—— 県営圃場整備事業芹ヶ沢地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ——

1993

茅野市教育委員会

はじめに

茅野市の北山地区は、国史跡の上之段遺跡の縄文時代晩期をはじめ、縄文時代前期の神ノ木遺跡、高風呂遺跡、下島遺跡など、縄文時代中期の遺跡の多い茅野市にあっては珍しい時期の遺跡が多く、また注目されている遺跡の多い地区でもあります。このような地区でもあるので、今回の県営圃場整備事業の実施にあたって、特に今までの縄文時代遺跡とは異なる遺跡立地をもつ場所にも注意を払って調査を進めているところであります。

今回の滝之脇遺跡の発掘でも、調査を開始するまではどれほどの遺跡であるかまったく分らない状態でした。遺跡の立地も今までの大きな遺跡とは異なっているようで、台地の南斜面にあるごく狭い範囲が調査されました。そのような中で縄文時代の住居址が3軒発見された他、小竪穴や土坑と呼ばれる遺構も検出でき、遺物も予想を遙かに上回る量が出土したようです。わずかな平地を利用して集落を営んだ縄文時代の人々がどのような生活をしていたのか、周辺の大きな集落の人々とどの様に関わったのかなどと考えると興味深いものがあります。

今後も様々な性格の遺跡の調査が行われる予定ですが、数千年の昔の生活を少しでも正確に再現していきたいものです。

最後になりましたが、発掘調査に協力いただいた地権者はじめ関係者の皆さん、参加された皆さんに心から感謝いたします。

茅野市教育長
両角 昭二

目 次

第I章 遺跡の位置と環境	1
第II章 調査の方法と経過	2
第III章 遺構と遺物	6
第IV章 まとめ	17

例 言

- 1 本報告書は県営圃場整備事業北山芹ヶ沢地区の造成工事に係る滝之脇遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、国庫及び県費の補助を受け、茅野市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査は、平成4年6月15日から7月17日まで行った。
- 4 発掘調査における記録及び整理は下記の調査員及び調査補助員が行った。
- 5 出土品・諸記録は、茅野市教育委員会文化財調査室で保管している。
- 6 本書の原稿執筆は、調査員の小林深志が行った。
- 7 本報告書の色調、含有物の表示については、標準土色帳を参照した。

文化財調査室

室 長 永田光弘

係 長 鶴飼幸雄

主 任 角角一夫

調査員 守矢昌文、小林深志（調査担当）、功刀 司、小池岳史、百瀬一郎、小林健治
伊東みゆき（平成4年9月30日まで）、山崎貴弘（平成4年10月1日より）

調査補助員 武居八千代、占部美恵、牛山市弥、牛山徳博、堀内 謙、伊藤千代美、赤堀彰子
関 喜子、小松とよみ、矢崎つな子、原 敏江

発掘参加者

（芹ヶ沢地区）北沢和夫、北沢みゆき、高辺三六、高辺さちほ、柿沢ちえこ、水谷ちとせ

（糸置地区）湯田坂やすゑ、宮坂和子、秋月五十子、湯田坂 芳

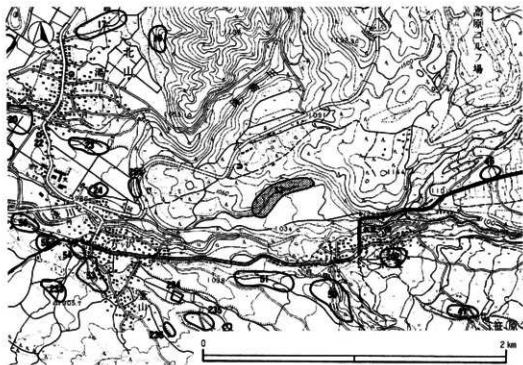
（その他）牛山矩子

遺物整理参加者 白飯スエ子、日黒恵子、清水園恵、伊藤京子、立岩貴江子

第I章 遺跡の位置と環境

八ヶ岳火山列の最北端に位置する蓼科山の西には、ゆるやかに傾斜する蓼科高原が広がっている。その裾から沢川の北側に沿って西に延びる台地の南斜面に本遺跡は位置する。所在は北山芹ヶ沢澁之脇で、標高は1041mを測る。八ヶ岳西南麓一帯には縄文時代を中心とする数多くの遺跡が発見されている。澁之脇遺跡の所在する北山地区にも昭和17年に国史跡に指定された上之段遺跡(17)をはじめ、高風呂遺跡、神ノ木遺跡(53)、下島遺跡(56)と様々な時期の縄文時代遺跡が分布している。対岸にも比較的大きな遺跡として知られる聖石遺跡(51)と長峰遺跡(52)がある。

本遺跡は茅野市史にも記載がある様に、古くから名前を知られていたが、現在では山林や水田となっており、遺跡の範囲確認さえ困難な状況となっている。昨年度、本遺跡が県営園場整備事業の北山芹ヶ沢地区の範囲に含まれている可能性がありそうだとということで、遺跡の位置と範囲を確認に行ったが、遺物の採集ができる畑が少なく、整備事業から外れた箇所でも僅かの土器片や黒曜石片を拾ったに過ぎなかった。今回調査の対象とした範囲は、その僅かに遺物の拾えた箇所から張り出した台地の先端にあたるところで、水田となっており遺物の採集も出来ず、削平されている箇所も多いと考えられたが、遺構や遺物の残っている可能性もあると考えて、調査することとしたものである。



第1図 澁之脇遺跡(52)の位置 (1/25,000)

第II章 調査の方法と経過

前章で述べた様に、今回の圃場整備事業に係る範囲が水田で、遺物の採集を行い遺跡の内容をあらかじめ知ることが出来なかったため、最初に試掘調査を行い、遺跡の内容や規模をみることにした。以下、調査日誌を抜粋し、調査経過に変える。

調査日誌

試掘調査は6月15日(月)に行った。試掘調査は重機によりトレンチを開けていく方法を取った。約2m幅のトレンチを4mおきに開けていったが、トレンチの名称については東側から順に数字で1トレンチ、2トレンチと呼称していった。なお、各調査区と呼称については、調査範囲に水田が3枚あったため、東側から西側に向かってA・B・C区とする。

A区には1～3までの3本のトレンチを開けた。遺構は検出できなかったが、西側の一番汐に近い3トレンチでは張り出した台地に西側に開く谷が入っている様子が確認でき、そこから押型文土器が数点出土した。

B・C区は4～14トレンチを開けたが、両側が高く、中央が低くなっている谷となっていた。中期の中業を中心とする遺物が多くみられたが、遺構の検出はなかった。

以上の試掘調査の結果から、A区は遺構の検出はみられなかったものの、台地の上面に遺構の検出が見込めた他、谷には茅野市では類例の少ない押型文土器の採集が期待されたため、台地の全面を調査することにした。また、B・C区については、遺物の出土は多いものの遺構の検出は望めそうにないため、遺物の採集を目的に、調査員が立合いながら重機で少しずつ包含層を剥いでいくこととした。

本調査は6月18日(木)から行った。まず、A区の表土層を全面にわたって重機で剥いでいった。北側は削平され遺構の検出はなかったが、中央付近から南側では住居址を始め、土坑などの遺構が幾つか検出され、トレンチ調査の甘さが痛感された。B・C区での遺物の採集を目的とした包含層の掘り下げは、試掘調査での遺物の出土に比して以外と少なく、期待を裏切るものであったが、かなりの量の遺物を採集できた。なお、出土遺物については、各トレンチ出土の遺物についてはトレンチ名を、トレンチとトレンチの間の遺物については、例えば4トレンチと5トレンチの間については4、5トレンチと6トレンチの間については5とした。この作業は二日間をわたって行った。また、作業員を入れての本格的な調査が必要となったため、茅野市農業基盤整備課に、作業員の手配を要請した。

6月24日(木)には、遺構の図面作成のための杭打ち作業を行った。杭は台地中央の北側に基準杭を打ち、南北方向に5mおきに杭を打っていき、それぞれの杭から東西に5mを単位とする杭を打っていった。各グリッドの名称については、南西隅を基点として、X軸である東西にアルファベット、Y軸である南北に数字を当て、A-1のように呼称した。

作業員を入れての作業は、6月29日（月）から行った。A区の表土を剥ぎ終わったところを遺構確認のための精査を行っていったが、住居址を4軒と、他に土坑が数基検出できた。土坑の中には陥し穴と考えられる隅丸長方形の平面形態を持つものや、土壇墓と考えられる平面形態が円形のものなどがみられた。住居址には押型文土器が多数出土するものがあり、縄文時代早期の住居址の可能性が高いものもある。また、中期初頭や中葉の遺物を多く出土しているものもみられる。

住居址の命名も行ったが、北側から押型文土器を多く出土する住居址を1号住居址、中期中葉の土器を出土する大きな住居址を2号住居址、台地先端の西側の住居址を3号住居址、東側の僅かに痕跡が残る住居址を4号住居址とした。2号住居址は重複している可能性がある。

遺構の掘り下げは7月1日（水）から行った。1号住居址とした落込みは確認面で押型文土器が多く出土しており、該期の住居址になることを期待していたが、掘り込みがしっかりしておらず、住居址になるか疑わしい。2号住居址は確認面で中期中葉の土器が出土していたが、掘り下げていくと前期末から中期初頭の土器が出土し始める。掘り込みはかなり深いようで、本住居址の時期がまだ定まらない。南東隅の壁際から黒曜石の破片が多量に出土した他、南西のA区画からドリルと石鏃が出土している。3号住居址は掘り下げを開始したばかりで詳細は不明。他に1号住居址の北にある1号土坑の半截と小竪穴の掘り下げを行った。1号土坑からは黒曜石の石核が出土。小竪穴はベルトを残し掘り下げを終了するが、無文の土器と黒曜石の破片が数点出土しただけであった。

7月2日（木）は、朝まで強い雨が降っていたが小雨となったので作業を決定する。作業員は4名と少なかったが、2号住居址の掘り下げを継続して行う。A区画からは昨日に引き続きドリルの出土があった。また、B区画からは石鏃が2点、凹石が3点出土した。住居址北側からは、格子目文を持つ押型文土器が出土しており、重複の可能性を引き続き探してみたい。

7月3日（金）は、2号住居址の掘り下げを継続して行う。A区画の掘り下げをほぼ終了する。外周が一段高いベッド状遺構になるかもしれない。作業員さんは半日で帰り、午後は調査員一人で掘り下げを行うが、3時過ぎに調査を中止する。

7月4日（土）は、2・3号住居址、2号土坑の掘り下げを行う。2号土坑は何軒かの住居址が重複しているようであるが、詳細は不明である。3号住居址はベルトを残し、柱穴までの掘り下げを終了する。2号土坑は半截を終了する。

本日、県教育委員会文化課市沢先生来跡。茅野市文化財調査室永田室長、鶴飼係長、両角主任同伴。

7月7日（火）は、2号住居址、4号住居址の掘り下げを行う。2号住居址の南側は、粒子の粗い砂質のロームで、水平に剥けていくため、床面と間違えて掘りすぎてしまう。4号住居址は北壁と西壁の一部が残っているだけであった。遺物も無く、炉や柱穴も検出できなかったが、一応住居址としておく。

7月8日(水) 1・2号土坑の土層断面図作成の後、完掘し写真撮影。1号小竪穴土層断面図作成。2号住居址は土層断面図作成の後、ベルトはずしに掛かるが、終了していない。また、西側の谷の掘り下げに入る。ここは押型文土器が多く出土したところであるが、遺物の出土が無のまま掘り下げを終了する。

本日、土地改良課青木技師他来跡。

7月13日(月) 1・2・3号住居址、1号小竪穴のベルトはずしを行い、終了する。2号住居址からは中央床面直上からスクレイパーが1点出土。3号住居址からは、礫と土器を併用した跡が検出された。実測用の釘打ちを行う。

7月14日(火) 1号小竪穴、3・4号住居址の写真撮影。1・2号住居址の平面図作成。2号住居址の平面図作成(未完)。

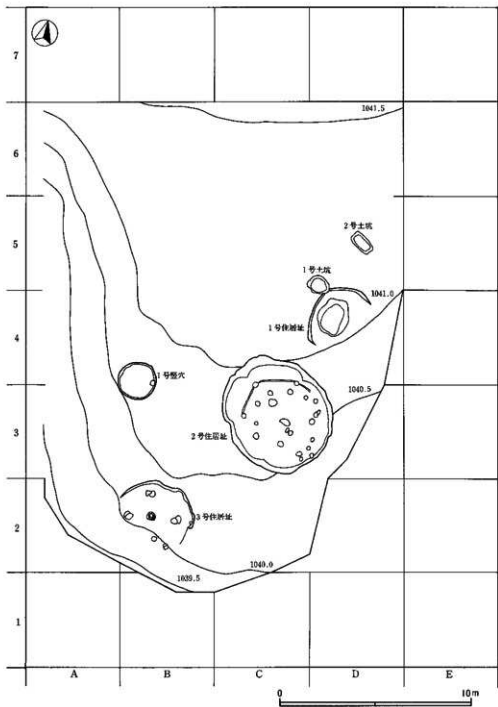
7月15日(水) 2・3・4号住居址平面実測図作成。2号住居址の清掃と写真撮影。西側谷の掘り下げ。押型文土器が数点出土するものの点数は少ない。

7月16日(木) 1・2号住居址平面実測図作成。遺跡内コンタ計画。

7月17日(金) 1号住居址の清掃と写真撮影。遺跡全景写真撮影。各遺構の補助計画。機材の搬出を行い、調査のすべてを終了する。



第2図 地形と試掘調査範囲 (1/2,000)



第3图 遺構分布図 (1/200)

第三章 遺構と遺物

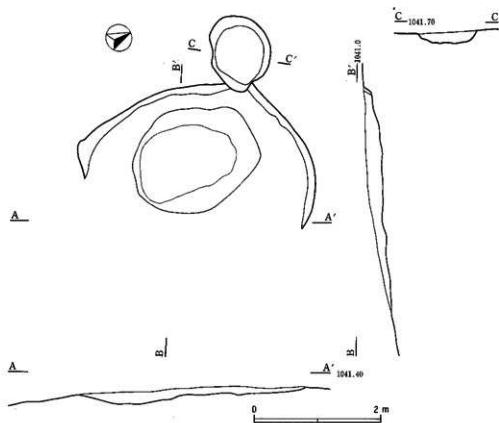
本遺跡からは住居址が3軒、小竪穴が1基、土坑が2基検出されている。調査時には4号住居址と命名した落込みもあったが、本遺跡のルームは砂質で数cmの厚さで水平堆積をしていた。このそれぞれの面が床面と誤認する結果となった。床面や柱穴もなく、遺物の出土もないことから、検出遺構からは除外してある。また、2号住居址の床面を掘りすぎてしまったのも、この砂質のルームが数cmの厚さで水平堆積をしていたことによる。

1. 住居址

住居址は3軒が検出された。すべて縄文時代のものである。

1号住居址 (第4図)

平面形態は不整形を呈する。規模は残存する最大幅で385cm、壁高は14cmを測る。床面がかなり荒れており、中央には倒木痕と考えられる大きな落込みもみられた。柱穴は検出できなかった。炉址は検出できなかったが、倒木痕の位置にあった可能性がある。周溝等の検出もなかった。覆



第4図 1号住居址 (1/60)・1号土坑 (1/60)

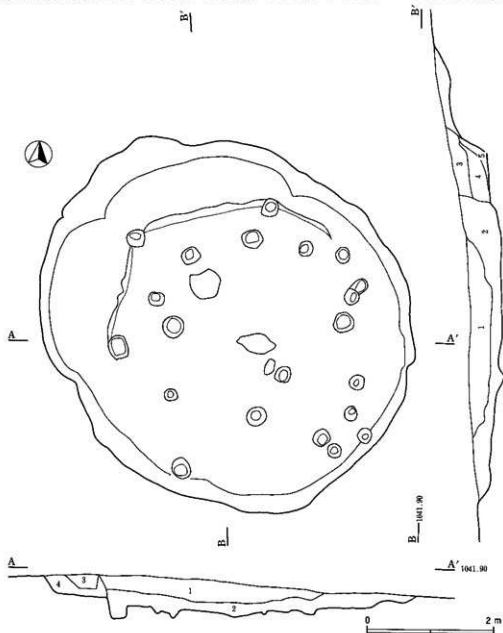
土は黒褐色土の単一層で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性は弱い。ローム粒子とロームブロックを少量混入する。主な遺物に押型文土器と石器がある。石器は打製石斧1点、磨石2点、特殊磨石1点、石鏃3点が出土している。本住居址は、遺構検出の段階から楕円押型文土器が数点出土しているが、倒木痕で荒れているためか、縄文中期の土器片も1点出土している。本住居址の時期は、縄文時代中期の土器片も出土しているものの、混入と考え縄文時代早期の年代を与えておきたい。

2号住居址(第5図、図版1-2)

遺構検出面で縄文時代中期中葉藤内期の土器が出土し、掘り下げを進めたが、中期初頭の土器が中心で、検出面で見た中期の中葉の遺物はごく僅かしか出土しなかった。器形を復元できるような土器は、検出面での中期中葉の土器だけで、一括土器の出土はなく、復元作業を行った後も、土器の形状を推定できるものは見当たらない。

平面形態は不整形を呈する。幾つかの遺構の重複と考えられ、北側及び西側に花びら状に広がる箇所が認められる。断面の観察からもそれを把握することが出来たが、掘り下げ時に平面的に確認することが出来なかったため、遺物は一括して2号住居址出土とした。規模は長径623cm、短径546cm、壁高66cmを測る。長軸方向は、N-53°-Wを指す。柱穴は、大小21個が検出されている。本住居址が重複している可能性があることから、検出された柱穴は同時存在でなく、幾つかのセットになると考えられるが、セット関係は明らかでない。規模は、最も浅いものが19cm、最も深いものが67cmを測る。床面が焼けている箇所が3ヵ所検出されている。規模の大小はあるものの、どれもしっかり焼けており、同時ではないと考えられるものの、重複すると考えられる北側及び西側の張り出しの床面よりは下がっており、最も新しい住居において、場所を変え使用されたと思われる。周溝等の検出はなかった。覆土は、中央の最も新しいと考えられる住居址が2層に、北側の掘り込みが3層に、西側の掘り込みが2層に分層が可能であった。なお、北側及び西側の掘り込みの上層の2層については同じ観察結果が得られているので、まとめて述べる。1層は黒褐色土で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。ローム粒子と炭化物粒子を少量含む。2層はやや黒味の強い暗褐色土で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。ローム粒子の他、炭化物粒子、焼土粒子を少量含んでいる。張り出し部の3層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。ローム粒子とロームブロックを少量含む。4層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性は弱い。ローム粒子・ロームブロックの他、炭化物粒子、焼土粒子を少量含む。5層は黒褐色土で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性は弱い。ローム粒子・ロームブロックの他、炭化物粒子を少量含む。以上の5層の他、北側の張り出しの更に北側に、浅い落ち込みが認められた。不整形で遺構としなかったため、平面図に記録しなかったが、暗褐色土で、炭化物粒子も少量認められた。また、本住居址の掘り下げにあたっては、1点1点を図に記録することは行っていないが、住居址を十字にベルトを残り掘り下げて行くことによって、ある程度の分布を掴むことが出来る。南西隅から時計回りにA・B・C・

Dと袋を分けて遺物を取上げていった。主な遺物には、石器がある。内訳は、打製石斧1点、磨製石斧1点、凹石5点、磨石2点、敲石1点、石皿1点、剥片1点、石鏃26点、石錐8点、石匙1点、剥片石器6点である。本住居址の特徴としては、土器の少なさと共に、石器の多さを指摘することが出来る。様々な種類の石器が出土している中でも、特に石鏃と石錐は出土が多い。石鏃は、遺構確認面で5点、Aで3点、Bで5点、Cで2点、Dで5点、ベルト内から6点と、遺

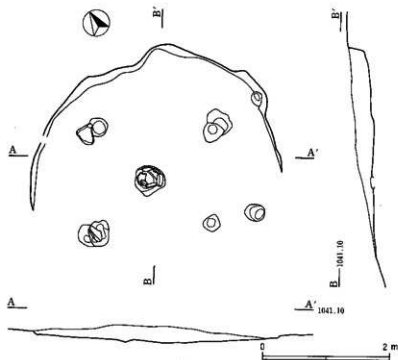


第5図 2号住居址 (1/60)

構内から平均して出土しているが、石錐はAで3点、Dで4点、ベルト内から1点と出土場所に偏りがみられる。この他に、剥片1,828点がある。剥片の中にはチャート4点が含まれるが、ほとんどは黒曜石である。本遺跡出土の剥片が、総計で2,041点であることから、本住居址出土の剥片が90%近くを占めていることになる。出土地点の内訳を述べると、確認面で84点、Aが167点、Bが209点、Cが303点、Dが808点、ベルト内が209点、北側の住居址に接する掘り込みで48点と、圧倒的に南東隅のDからの出土が多い。本住居址の時期は、遺構確認面から中期中葉の土器が出土しているものの、覆土内からの遺物はほとんどが中期の初頭に位置するものであり、該期に所属すると考えてよいものと考えられる。

3号住居址 (第6図、図版2-1)

平面形態は円形になると思われるが、南西側を流失している。規模は、遺存する最大幅400cm、壁高26cmを測る。柱穴は、重複も含めて7個が検出された。柱穴の深さは23~62cmを測る。この他、東側の壁際に小ビットが検出されている。炉は3方を礫で囲む石囲炉であるが、中に土器が埋められており、埋燵炉の性格を合せ持つものである。周溝等の検出はなかった。覆土は黒褐色土の単一層で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。ローム粒子・ロームブロック・炭化物粒子の他、床面には焼土粒子が認められた。主な遺物に縄文土器の他、打製石斧1点、凹石1点、石錐1点が出土している。黒曜石の剥片も54点を数えた。本住居址の時期は、出土した縄文土器から中期中葉の猪沢期に所属するものと考えられる。



第6図 3号住居址 (1/60)

2. 小竪穴

住居址状の掘り込みであるが、規模がやや小さいこと、灰が検出されなかったことなどから、小竪穴とした。本遺跡からは1基が検出されている。

1号小竪穴（第7図、図版2-2）

平面形態は円形を呈する。規模は長径198cm、短径198cm、壁高37cmを測る。床面・壁面ともしっかりしており、遺存状態は良い。東壁際に床面からの深さが22cmの小ビットがある。灰は検出されなかったが、下層には焼土粒子・炭化物粒子の混入がみられた。周溝は認められない。覆土は、断面の観察では暗褐色土の1層であったが、掘り下げて行く中での印象では上層がローム粒子の混入が多いやや明るい暗褐色土、中層が細かいローム粒子の混入が多い暗褐色土、下層が焼土粒子・炭化物粒子の多い黒みの強い暗褐色土であった。下層は床面から4cmの厚さで堆積していた。遺物は、無文の土器の小片が3点出土しているだけである。時期は不明と言わざるを得ないが、覆土は押型文土器だけが分布していた、調査区の西側の谷に堆積していた土壌に類似していたことを記録にとどめたい。

3. 土坑

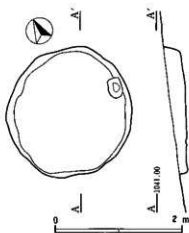
本遺跡からは2基の土坑が検出されている。

1号土坑（第7図、図版3-1）

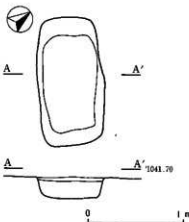
平面形態は楕円形を呈する。規模は長径120cm、短径96cm、深さ14cmを測る。長軸方向は、N-64°-Wを指す。南西で1号住居址と重複するが、新旧関係は不明である。覆土は黒褐色土の単一層で、粒子は細かく、締りもあるが、粘性に乏しい。ローム粒子と炭化物粒子を少量含んでいた。遺物は、黒曜石の剥片を1点出土しただけである。時期は不明である。

2号土坑（第8図、図版3-2）

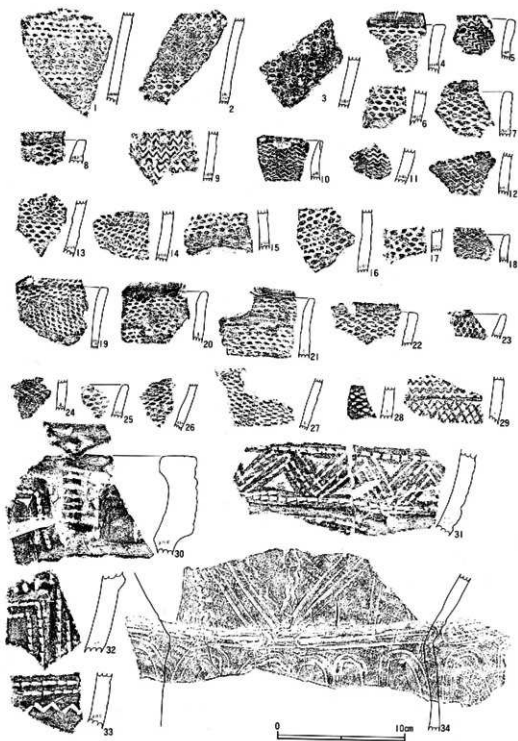
平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は長径137cm、短径73cm、深さ22cmを測る。長軸方向は、N-58°-Wを指す。覆土は2層に分層が可能である。上層の1層は、赤褐色土で粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。これより上層が水田となっていたためか、鉄分を多く含み酸化している。2層は黒褐色土で、1号土坑と同じ観察が為されている。遺物には、黒曜石製の石匙の他、黒曜石の剥片3点がある。時期は不明である。



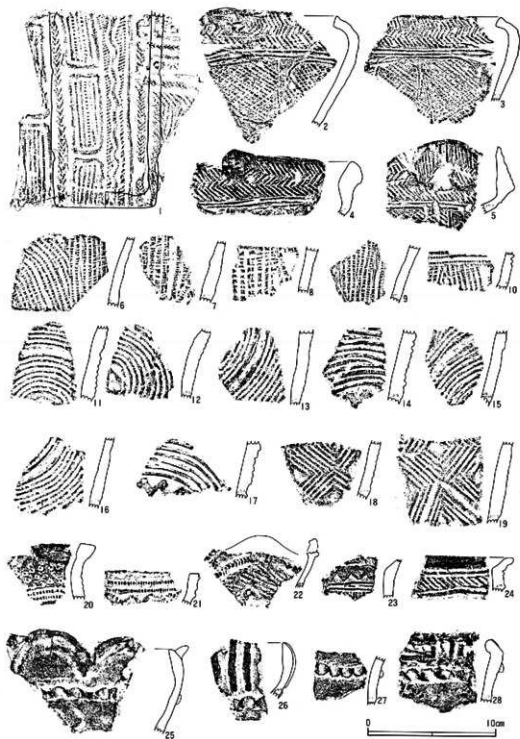
第7図 1号小竪穴 (1/60)



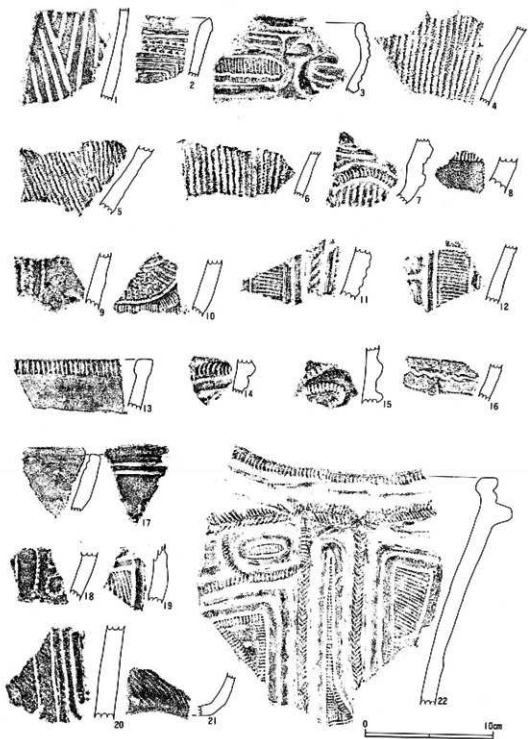
第8図 2号土坑 (1/40)



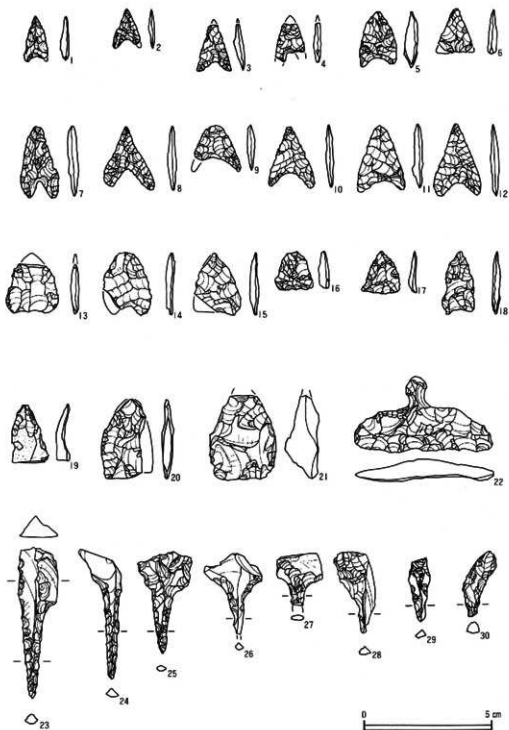
第9図 1号(1~9)・3号(30~34)住居址出土土器・押型文土器(10~18は2住、19は3住、20~29は遺構外)(1/3)



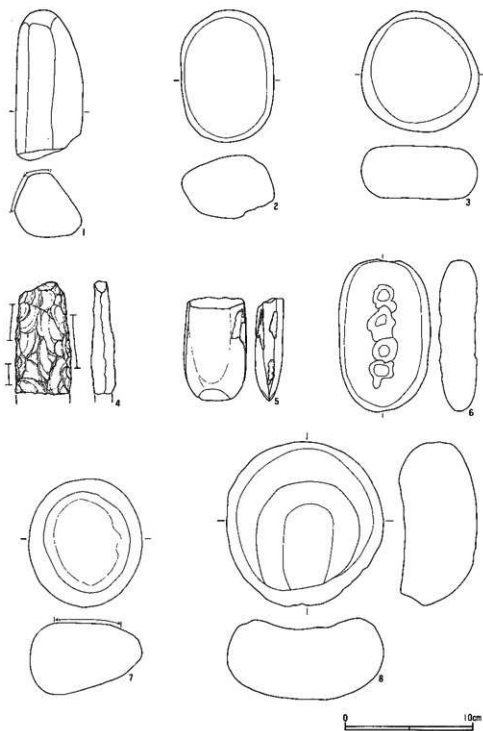
第10图 2号住居址出土土器 (1/3)



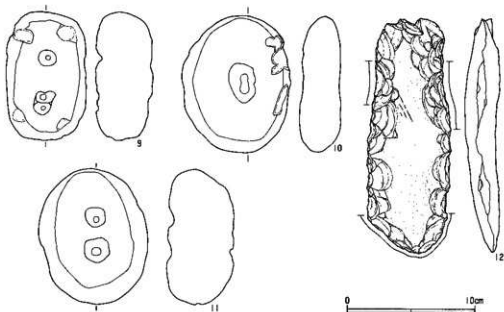
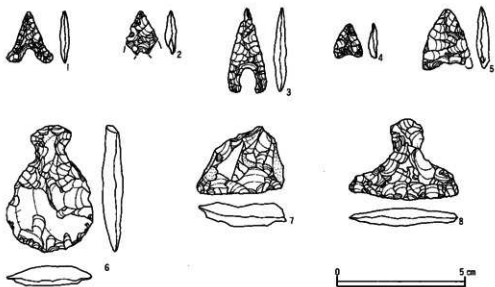
第11图 B·C区出土土器 (1/3)



第12図 2号住居址出土の石器 (2/3)



第13図 1号住居址(1-3)・2号住居址(4-8)出土の石器(1/3)



第14図 1号住居址(1~3)・3号住居址(9)・2号土坑(6)・遺構外の石器(1~8は1/3、9~12は1/3)

第IV章 ま と め

本遺跡は、古くから知られた遺跡で、かつて調査も行われたことのある遺跡であるが、現在はほとんどが山林と水田になっており、その位置さえもわからなくなってしまっている。

今回の調査に先立って、遺跡の範囲を確認するために訪れた際も、今まで我々が遺跡として認識しているような地形と異なっており、どこを調査の対象としたらいいかと考えたものである。幸いに、わずか数片ではあるが黒曜石片を採集したが、今回の土地基盤整備の範囲からは農道を隔てて範囲外であった。今回調査の対象とした箇所は、遺物の採集できた畑から小さく舌状に張り出したところで、水田になっており、遺物の採集は困難であったが、遺跡の範囲と性格を見るために調査を行うこととした。

本遺跡からは、縄文時代の住居址3軒、小竪穴1基、土坑2基が検出された。これらの遺構の検出は、当初の予想を上回るものであり、今後、遺跡立地を見る上で考え直さなければならない。

1号住居址は、倒木痕と考えられる攪乱が入っており、時期の異なる遺物も出土しているが、土器や特殊磨石などの石器から縄文時代早期の押型文の時期ではないかと考えられる。

2号住居址は、遺構確認図から中期中葉の一括土器が出土し、該期の住居である可能性があると考えられたが、覆土中から出土した遺物の多くは中期初葉のものであった。本住居址からは多くの石器が出土しているが、特に石鏃と石錐の量が多い。石匙の出土と合せ、本住居が主に狩猟と皮革生産に従事していた人々の住居であると考えられる。また、1,800余点の黒曜石剥片は本遺跡出土の黒曜石の90%近い数字であり、石器製作も頻繁に行われていたのではないかと考えられる。また、凹石や磨石・敲石に混じって、使用の痕跡が無く、持つのに手頃な礫が多く出土している。これらが前述の石器として使用される以前の状態なのか、既に何かに使用したものの我々がその痕跡を見出せずにいるのかは、今後科学的分析等を行わなければ解明されれないが、調査・整理作業中に気付いた点として記しておくたい。

3号住居址は、縄文時代中期中葉の住居址と考えられるが、出土した土器の量に比して黒曜石の剥片の量が多い。その量は2号住居址とは比較にならないものの、54点を数えた。

この様に、住居址が3軒検出されているものの、その時期はすべて異なっている。これらがそれぞれ単独で存在していたかは、調査範囲が限られており明確に出来ないが、調査区の北側である斜面に掛かる地点に遺跡の広がりを見るほうが良いのではないかと考えられる。また、この調査中に、地元の方からかつて調査地点より更に数十m東に上った地点で作業小屋を作る際に出土したという遺物の寄贈を受けている。その遺物は本報告書に掲載してあるが（第11図22、第14図12）、遺跡が広い範囲で広がっていることが理解される。

滝之脇遺跡出土石器数量表

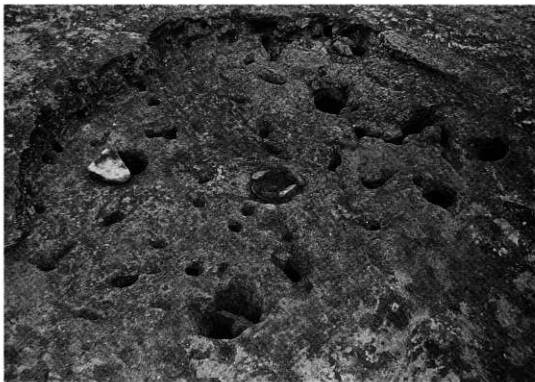
調査区/ 遺構	打斧	磨斧	凹斧	磨石	特殊 磨石	敲石	石皿	剥片	石鏃	石錐	石匙	剥片 石器	剥片 原石	その他・備考
1号住居址	1			2	1				3				56	チャート3、赤色チャート1を含む
2号住居址	1	1	6	2		1	1	1	26	8	1	6	1828	石鏃1点はチャート、剥片にチャート6を含む
3号住居址	1		1					2	1				54	
1号小竈穴													2	
1号土坑													1	
2号土坑											1		4	
1トレンチ														
1'														
2トレンチ														
2'														
3トレンチ				1									3	
3'														
4トレンチ														
4'														
5トレンチ														
5'														
6トレンチ														
6'														
7トレンチ													2	
7'														
8トレンチ				1									2	
8'														
9トレンチ														
9'														
10トレンチ														
10'	1													
11トレンチ						1								丸石1
12トレンチ				2										
表土・表探				1					3		2		89	チャート2を含む
他地区	1													
合計	5	1	12	4	1	2	1	3	33	8	4	6	2041	



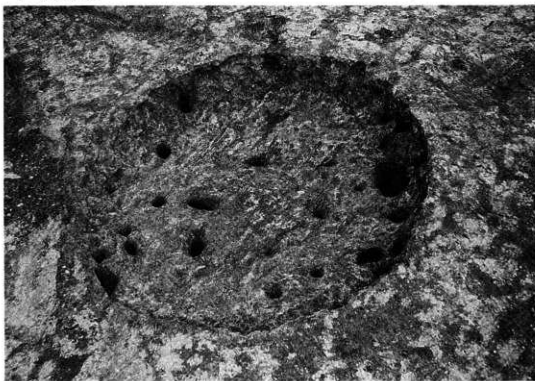
1 遺跡遠景



2 2号住居址



1 3号住居址



2 1号小整穴



1 1号土坑



2 2号土坑

滝之脇遺跡

—— 県営園場整備事業芹ヶ沢地区に伴う ——
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成5年3月20日 印刷
平成5年3月24日 発行

編 集 長野県茅野市塚原2丁目6番地1号
発 行 茅野市教育委員会
印 刷 ほおずき書籍株式会社
